

「釈迦堂縁起絵巻」をめぐる一考察
第一巻・第二巻仏伝部分を中心に

土谷真紀

本論文は、清涼寺に所蔵される狩野元信筆「釈迦堂縁起絵巻」について考察したものである。注目すべきは、その第一巻、第二巻に描かれた仏伝部分の図様が、明代の仏伝図の図様に依拠していることを明らかにしたことであろう。これまでも、同絵巻と明代の版本との関係は、さまざまに議論されてきたが、本論文において、明代の版本『釈氏源流』を見出して、「釈迦堂縁起絵巻」の図様との類似性、共通性を指摘するとともに、狩野派の作画志向に言及することで、今後の研究の進展に期待のできる成果を上げたことは、きわめて意義あることだと思われる。というのも、本論文は、元信の仏画は正信が撰取した明代仏画の延長線上にあると主張した辻惟雄氏の研究を大きく前進させ、現存する『釈氏源流』を根拠に、「釈迦堂縁起絵巻」が明代の渡来図様を援用したものだという主張を具体的に考証することに成功しているからである。

「縁起の改変」の二章では、仏教彫刻史の研究においても注目されている、いわゆる「生身仏」説なども援用しながら、仏伝を組み込んだ意図について、「清涼寺本尊を釈迦と同一化させるため」という結論に導く主張は出色のものだといってよい。すり替え譚から入れ替え譚へと展開する本尊縁起の改変についても、先行研究を踏まえながら着実な議論を展開しつつ、仏伝の組み込みについて考察を進める箇所などは、土谷真紀氏の研究者としてのすぐれた資質を示すものである。

本論文に見られる新知見については、元信研究と狩野派研究に新たな視野を提供するもので、選考委員会において学会賞に推す決定的な理由となった。また、論文全体として、緻密であるとともにスケールの大きな研究であるという意見が委員から出たことも記しておきたい。加えて、図様の影響関係を論じた箇所は、『釈氏源流』に着目したという、いわゆる典拠の発見に止まらず、論の展開とその叙述において、具体的で説得力があるとともに、読者の興味を惹く構成となっている。複雑な内容を明快に論じ、読みやすい内容にする手際のよい論の進め方など、完成度の高い論文となっていることが高く評価された。

以上により、土谷真紀氏に『美術史』論文賞を贈り、その功績を称えたい。